

人は何のために働くのか。「自分と家族を養っていくため」「社会とつながり、社会に奉仕するため」——人によって答えはいろいろだろうが、単に食うだけなら勤めを続ける必要はないと、あっさり脱サラしたのが堀内弘司さん（49歳）である。

## 「プチ富豪化設計書」

かねてから考え、準備もしていたのだが、2006年3月、自分の考えをまとめて「プチ富豪化設計書」を書き上げて頭の中を整理、同年末N T T東日本を退職した。「設計書」に基づき、現在は13部屋を都心に持ち、その家賃収入で悠々自適、再び学生の身分に戻った。早稲田大学院アジア太平洋研究科に籍を置き、国際関係学博士になるべく華僑ならぬ「和僑研究」にいそしんでいる。

「辞めたのは45歳のとき。45まで生きれば90まで生きるかもしれないとすれば、45歳は折り返し点です。前半の45年には22年の学びの期間があった。後半の20年にも学びの期間があつていい。人生を2度生きてみようと考えたのです」

ウーム。人生の達人の発想と言えよう。老年期をカットして青春期、男盛りの期間に変えようというのだ。堀内さんは自ら「温和で世話好き。聞き上手。発想が豊か」と評している。たしかに発想は豊かで、その人生は都会のただ中に住みながら、現版「仙人」の名に値する。1961年東京・北千住の生まれ。生家は商店街の中の歯科医で、3男坊の末っ子である。10歳のとき家は高円寺に移り、高校は受験校として知られる都立西高に進んだ。一浪し、大学受験の前日、父親が亡くなった。

81年東京の私大に進んで政治学を学び、サークルは企画事業研究会だった。研究会は学園祭の興業にも絡み、梅沢富美男や安全地帯などのデビュー・プロデュースも手掛けた。「一番印象に残っているのはロックバンドの『ルースターズ』を学園祭に呼んだことです。今でも彼らをリスパクトしているミュージシャンは多いんですけど、一人の先輩が心酔し、何が何でも成功させると。しかしソロバンを弾くと70万円ぐらいの赤になる。学生の身でそんな大金は手当てできず、会員は青くなり、違約金を払ってでも中止しようかとなったんですが、先輩は『お前ら、自分の体を売ってでも成功させろ』と。

要さを教わった気がします」85年に大学を卒業し、日本IBMに入社、第一営業本部に配属された。ここで1年目に東京電力、2年目からセコム、三菱総研を担当し、情報システムの企画、構築、運用などを一括して行うシステム・インテグレーションを提案、導入し、120億円の商談をまとめたこともある。大学時代はITの素人だったが、入社してから仕事を通して知識を習得した。電気カミソリは髭を剃りながら、自分の刃を磨くそうだが、それと同じで、無駄なく、実用の場で通用する知識や技能を身につけていった。

## 華麗な転職経歴

だが、IBMに飽きたらなくなり、88年、得意先だったセコムに移籍、

# さらばリーマン

32

40代にして大学院生活を送る堀内弘司さん。学ぶテーマは「和僑」である。

「いままで米国を向いてきたが、今後はアジアを向いてキャリア充実を図りたい」その言葉の背後にある、華麗な経歴と綿密な計画、そして祖父への想いとは——。

## 溝口 敦



堀内弘司さん

最初はマーケティング企画室に配属された。90年からは半年かけてセコムフェア90プロジェクトの企画運営を担当し、半年かけて全国7都市でのPRプロモーションを経験。その後は同社の情報戦略部に配置換えとなり、IT化戦略の施策立案などを担当した。95年には子会社の武蔵野三鷹ケーブルテレビに課長として出向、96年7月の開局に向け、マーケティング全般の企画構築をほぼ一人で担った。

煩雑になるので詳細は省くが、堀内さんは最初に外資系を経験したせいか、一流企業を股に華々しい転職を繰り返している。97年サン・マイクロシステムズ入社、04年、同社を退社、すぐ東日本電信電話株式会社に入社、06年末、事業戦略担当ディレクターを最後に同社を退社という経歴である。

日本では転職を繰り返すと、その度に給料がダウンしがちだが、堀内さんは転職の悲哀とは縁がない。平成不況の時代にも、入社を請われる人材であり続けたからだ、とはいえず、新しい職場環境はストレスが多い。自前で現在以降老後までまかなう前記の「プチ富豪化」計画に踏み切ったのは、十分理解できよう。働

きがいを感じられぬ職場で耐え忍ぶだけの人生はごめんだし、脱するための資金は準備されていた。

プチ富豪化にはきっかけがある。サラリーマン時代、高円寺で住まいを建て替えるとき、1階に貸し室4室を設け、2階を居室にした。駅から5分という交通至便の地だから、借り手が絶えることはなく、今に至るまで副収入をもたらして続けてくれた。

これで堀内さんは不動産の有利さに気づいた。株と違って賃貸料収入は変動が少なく、暴落することがない。問題は借り手の確保だが、都区内で駅から5分以内という条件を満たせば、市況に合わせて家賃を下げる覚悟さえあれば、つねに借り手は絶えない。

地震は怖い。どう備えるか。その後の賃貸物件はお茶の水、赤坂、目白、新宿、中野、桜上水などに分散して求め、しかも表通りに面している物件を選んだ。危険の分散化である。その上、表通りなら地震で倒壊しても、都や区が放置しないという読みからである。

「プチ富豪化」のミソは、年利10%で運用できれば、7年で2倍になるという事実です。25歳で始めると32

歳で2倍、39歳で4倍、46歳で8倍、53歳で16倍、60歳で32倍という計算になる。つまり25歳で投資用のワンルームを1室買うと、60歳で32室持てる。東京の賃貸不動産市場は派遣テント村以来、大きく下降してしまいが、まだ微調整すれば、なんとかなる状況です」

堀内さんの今の生業は「大家」業であり、時に13の部屋の管理で、不動産業者と打ち合わせ、補修したりする。が、賃貸物件の基本は手間暇要らずだから、大学院で学ぶ時間はたっぷりある。

## なぜ和僑を学ぶのか

研究テーマは和僑である。海外に出て起業し、その地に居着く日本人を指すが、堀内さんの祖父もまた和僑だった。明治時代、15歳でシアトルに渡り、クリーニング業や花屋、農園経営、石油掘りもした。最終的にオクラホマ州のタルサでギフトショップを営んだ。

反日意識が高まってきたため、1931年に帰国した。死んだ父はタルサに育って、太陽が大平原の西に没する景色をしばしば懐かしんでいたという。堀内さんは大学生のとき

渡米し、タルサなど祖父の跡を尋ねたことがある。

だから、今は中国に渡る日本人を研究するため和僑なのだ。堀内さん自身がゆくゆく和僑になりたい。研究は和僑実現のため、下調べの意味合いも持つ。09年夏から半年間、上海に滞在し、20〜30代の日本人起業家60人を面接調査し、10年『キャリア充実を求め、中国に越境する日本人アントレプレナーの民族誌的研究』という論文にまとめている。

「サラリーマンを下りたおかげで人生をもう1回楽しめている感じで、ともに大学院研究生をやっています。将来的には日本と中国を結ぶ仕事をやってみたい」

堀内さんは満足げにこう言うのだ。世間の目や評価に左右されない。自分の価値観だけを羅針盤に、全ては自己責任、自助努力と心得て、わが道を行く。明治時代、単身渡米した祖父の血が脈々と堀内さんに流れているようだ。狭い祖国にや住み飽きた、とばかりに。

〔みぞぐち・あつし〕ノンフィクション作家、ジャーナリスト。1942年東京都生まれ。主として日本社会の暗部である暴力団や新宗教に焦点をあてて執筆活動が続ける。「食肉の帝王」巨富をつかんだ男「浅田満」で第25回講談社ノンフィクション賞受賞。